

◆ 不撓不屈 藤高球児 ◆



勝利の女神は微笑まなかった…。夏の甲子園の代替大会として行われた本県の「2020年 夏季茨城県高校野球大会」。

ともに甲子園への上場経験があり、これも奇遇だが、同じ取手市内同士の対戦となった対江戸川学園取手高校戦。時折激しく降る豪雨のため、バントの

球速も止まってしまうような荒れたグラウンドコンディションの中、延長10回タイブレークの接戦を制したのは、本校ではなかった。

振り返れば年度をまたいだ臨時休業。そしてようやく練習が再開できるようになったのは6月の上旬。特に3年生部員にとっては、待ちに待った日であったことと思う。

通常の大会であれば懸命に声援を送る応援委員・チアリーダーそれに吹奏楽部もいない。保護者の皆さんも懸命に拍手を送っているのみだ。そのせいか、いろいろな“音”がよく聞こえる。

2回の裏に1点を先制された。荒天の中、ゲームコントロールは難しかったであろう。この後も、出塁を許すが、要所を押さえながら同点に追いつきそのまま9回終了。規定により、ノーアウト1、2塁からのタイブレークによる10回の攻防である。

10回表に1点加点し、そのまま逃げ切れるかと思ったが、その裏に2点を奪われた。

「(前略)試合を通じてフェアの精神を体得する事、幸運にも驕らず悲運にも屈せぬ明朗強靱な情意を涵養する事、いかなる艱難をも凌ぎうる強靱な身体を鍛錬する事、これこそ実にわれらの野球を導く理念でなければならない。」

「学生野球憲章」の一部である。

まさに、今の苦境の中(悲運にも屈せぬ…)学生野球の目指すべき方向を指し示す清々しさがここにはある。

結果はともあれ、一区切りだ。まずは「悲運にも屈せぬ明朗強靱な情意を涵養する」ことだ。

NHK「奇跡のレッスン」で、青森県のスケートクラブの小中学生を指導するピョンチャン五輪銅メダリストのハビエル・フェルナンデスの映像を見た。彼はこう言う。

「結果なんかどうでもいい。これまでどれだけ「努力」してきたかが大事。」

既に現役を引退しているとはいえ、まだ29歳。どちらかと言えば、ネガティブな受け止め方をされるであろう「努力」という言葉を、オリンピックプレーヤーが使っている。とてもうれしかった。

さて、今度は君たちの番だ。君たちの「努力」はこんなものではないだろう。

胸を張って進もう。「不撓不屈」の精神とともに！

